

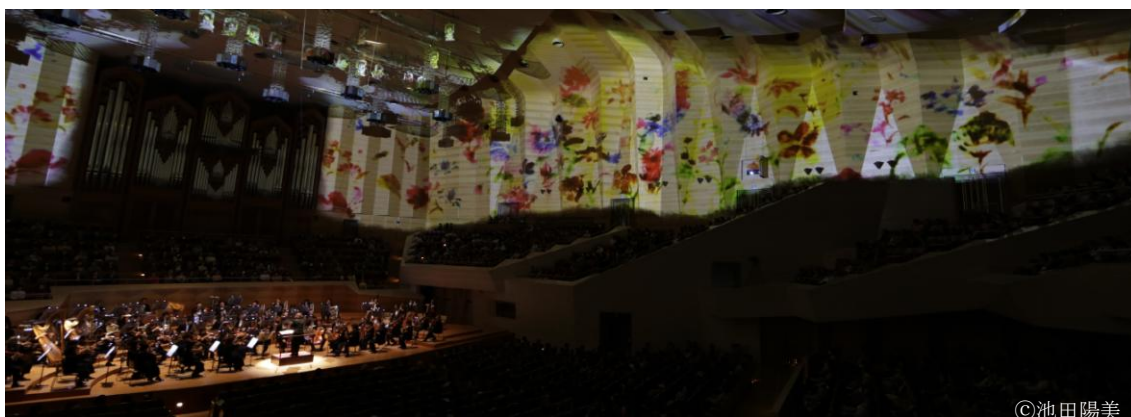
JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA
1-6-1 Umezato, Suginami-ku, Tokyo 166-0011 Japan
Tel. +81-3-5378-6311 Fax. +81-3-5378-6161

西本智実ミュージック・パートナー・シリーズ Vol.1

～2013年11月24日 懇談会レポート 於：サントリーホール～

11月、いよいよサントリーホールで、ミュージック・パートナー・シリーズが始まりました。
オリジナルの作品解釈、見たことのない空間芸術、極めて稀で挑戦的、かつ画期的な公演でした。

終演後、懇談会を行いました。日本フィルの平井専務理事の挨拶にはじまり、指揮者であり、台本も手掛けている西本智実、アートディレクターの田村吾郎、機材提供のクリスティ・デジタル・システムズの吉田ひさよが記者陣の前でお話しをし、質問にお答えいたしました。下記抜粋をお届けいたします。



©池田陽美

日本フィル・ミュージック・パートナー 西本智実（指揮・台本）



©池田陽美

『くるみ割り人形』はバレエ作品ですから、本来バレエとやるものです。普段演奏会で取り上げられる曲は、ほとんど抜粋された組曲ばかりですが、今回はバレエ音楽をほぼ全曲演奏いたしました。

この作品は、チャイコフスキーの最晩年、シンフォニーでいいますと第6番「悲愴」を作曲していた時に並行して創った作品です。革命の足音が聞こえていた時代のことで、夢物語の話ではなく、実際にいろんなものが隠されています。貿易、革命・・・作品の裏側には、いろいろ意図が隠されています。それらを出すには、全幕を演奏しなければ、ストーリー展開が出来ないと思います。

今回は新しい試みとして、中身に少し肉薄出来たらなとずっと思い続けています。キャラクター設定や作曲家の隠れた意図などをアートディレクターの田村さんにお伝えし、映像化していただきました。それにしてもこの音楽は本当に素晴らしく、やはり劇場で培ってきたものもたくさんあります。ロシアの劇場で培ってきたものも今回盛り込んで演奏いたしました。

アートディレクター：田村吾郎

私はもともとは東京藝術大学で美術を学んでいた人間です。僕の父がオーボエを作っている人間という関係で、そのオーボエを作っているのがサントリーホールに沢山並ぶから写真撮りに来てよ、と言われて、カメラを持って写真を取りに来た。その時にたまたま同世代の音楽家の方と知り合って、ドイツのリートを日本で公演したいがなにかいい方法ないかと相談されたのがきっかけで、映像を使った音楽の公演をやるようになりました。それが6年、7年ぐらい前でしょうか。それ以来ご縁があって色々な公演に呼んでいただいて、やらせていただいています。今まで50～60公演やっていますが、基本的には演奏者の背面の後ろに映像を出すというのが多いです。今回サントリーホールでやると聞いたときに、うーん、これは困ったな、と。P席がある。横のLA、RA席があるとなると、視線が取り囲むようになる。その視線の向こう側に映像を出すためにはどうしたらいいのか、と。ということを考えて、結



©池田陽美

果的には壁に出す以外ないな、と。ということで今回はマッピングが全面になったわけですが、技術的にはかなり大変でした。映像の作り方、信号の送り方、照射の仕方諸々かなり大変だったところがありますが、逆に大変だったからこそ、こんなことができて良かったなと思います。今までクラシックときくとちょっとどうかな、と思っていたお客様が、映像も付くよ、というだけで、じゃ行ってみようかなとなるとか、新規のマーケットが開拓されたりとか。それでクラシック音楽だったり、映像だったり、様々なことが有機的に絡みながら、盛り上がっていく、活発になって行く、ということになれば一番いいな、と思います。

クリスティ・デジタル・システムズ 吉田ひさよ（機材提供）



©池田陽美

北米に当社がございます、業務用プロジェクターメーカーのクリスティ・デジタル・システムズと申します。一番シェアを頂いているのは、映画館に入っているデジタルシネマのプロジェクターで、世界では約60%強のシェアを頂いているのですが、残念ながら映写室に入っているの、一般の方がしかにご覧になるということはないと思います。私どものプロジェクターの特長としては、大きくて非常に明るく、解像度も高い。会議室などで使用されるプロジェクターと比べると、筐体の大きさは3倍~7倍あります。そのような大きなプロジェクターを活用して頂く市場を作ろうということで、NHKエンタープライズさんなどと組んでプロジェクションマッピングをしかけてまいりました。皆様のご記憶に新しいところでは、昨年9月、東京駅で行われた東京ステーションビジョン等がございます。ヨーロッパではコンサートホールなど音楽専用ホールでプロジェクションマッピングを使った演出がよく行われています。屋外だけでなく、ホール内つまり屋内での事例も目にします。またクラシックだけではなく、ポピュラーアーティストのアリーナコンサート等でも、中で映像が使われていて、今現在では日本のJ-Popのアーティストの方とかも、アリーナコンサートでかなり映像を多用していると聞いております。そういった場で活用頂けるプロジェクターということを広く沢山の方に知って頂きたいと思い、今回、サントリーホールでクラシックのコンサートで初めてオーケストラと映像の融合でお客様に楽しんで頂く企画があるということで、私どもは全面的に協力させていただきました。これから様々なプロジェクター、というか大きな映像を使った様々な演出方法が、色々なクリエイターの方、アーティストの方に知って頂いて、広がっていけばいいなと思い、今後も私どもの文化貢献活動の一環として続けていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

質疑応答

質問①

——西本さんにまずお伺いしたいのが、出来上がった映像をご覧になったときのご感想と終えられたときの率直な感想をお願いいたします。

西本：GPではまだ準備ができていなくて見れないところがありました。でも打ち合わせを長くやりましたのでキャラクター設定とか、そういったところは田村さんにお伝えしております。

質問②

——田村さんは、一番ご苦労された点と、素朴な疑問としてどうやって映像と音楽を同期させているのかな、と。

田村：苦労した点は色々あります。U字のでこぼこの壁を回っていく大きな絵、全部で130mあるんです。その映像を制御し、コンテンツを書いて、2時間の音楽に合わせる。それも音楽の進行が音源より早くなったり、遅くなったりします。それをどうやって吸収するかを考えていきます。背景があって、真ん中のモチーフがあって、さらにその前に他のモチーフがあって、レイヤーになっているんですね。それは音楽的に通奏低音があって、その上にモチーフがあって、そういうことと僕の中ではリンクさせながら作りました。それが果たして音楽と合うのか、感覚的に、直覚的に合うのかどうか。しかもやってみているのはモニターの中での話なので、空間になったときにどう見えるかというのは、本当に想像でしかありません。想像しながらやって、初めて今日私もみたわけですが、ああ、こんな感じが凄いな、と思う反面、ここってこんなになるんだ、と思ったところもあったりしました。初めてやった事なので、そういう部分は沢山ありました。次回以降に活かしていければと思っております。

音楽と同期させる方法ですが、あれは実はオペレータが2人おられます。オペレーションとしては動画を事前に作りました。それを途中で止めていく。なので、映像がたまにすーっと止まっているところがあります。そこで時間を調整しています。それは下手と上手でわざと合わせなかったりします。刷毛があってしまうと、非常に単純になってしまうので、わざとずらしたりします。同時に出したいときは、ぱっとだしたり。というのをマニュアルでやってます。オペレーションをしているのが、東京芸大の音楽の人で。楽譜も完璧に読める、演奏も出来る人がやってます。ほとんど演奏するかのように、やってます。

西本：オペラの照明も、字幕も指揮者を見て、キューだして、そういう同じような形で。ピストルとか何箇所か、時計が鳴ったりとか、音合わせ的なこともありますから。

田村：だから一番最初のところは必ずモニターを見ながらやってますね。

西本：言葉ちゃんと映ってました？

田村：出てましたよねー。

西本：あの言葉は絶対入れて下さいって言ったんです。2回出して。必ずこの曲とこの曲に出すようにお願いしました。

質問③

——2回、3回と続くと思うのですが、今回ライブペインティングという形で進んだと思うんですけど、次回以降、がーんと変わるのか、似たようなコンセプトで行かれるのか。

田村：3回で1つの公演と考えると、がらっと手法を変えることはやりたくないです。細かいところの方法として、考えていることはたくさんあります。

質問④

——とても新鮮な体験で、楽しませていただきました。とても素朴な質問でもいいでしょうか。両脇の壁では映像は同じものが映されていたのでしょうか。片方の壁しか自分の席からは見えなかったのです。

田村：ネタばらしてきな感じになりますが、アイディアの段階では色々考えてました。左右を別の者にしたりとか、1枚のものにしたりとか。全面映された空間を見たことがないので、どのぐらいの情報が知っている人に処理できるのかというのが分からない。音で聴覚的な情報を聞きながら、さらにそこに視覚的な情報が加わってきて、それで左右違うものが動いていて、それで脳が処理できるのかどうか。できないとなると今度は聴覚に影響が出ますから、音楽がよく聞こえなくなってくる。そうなるともう本末転倒ですから。それはやめようということで、今回は左右同じことにしています。で、僕自身が今日見た限りにおいては、もう少しいいけるな、と。情報掲出も大丈夫だなという感じがしましたので、次回以降はもう少し手の込んだことが出来ればと思っています。と言うわけで、質問の答えとしましては、基本的には同じです。ただ、文字が反転してしまったりするので、その部分は修正しています。

——それで前の席と後ろの席では見える部分が違うんですね。普段コンサートホールで音楽を聞いていると大体舞台上を見ているですから、こう後ろを見ていていいものなのかどうか、戸惑ってしまう部分もあったんですけども。

田村：みなきゃいけない情報が出ているであろう状況で見れない、というのは凄いストレスなんですよ。ね。だけど、見なくても大丈夫なんだろうなという情報であれば多分、そんなにストレスがないんですよ。そういうことで情報の管理をしっかりしておけば、恐らく、こっちとこっちの映像が違うことも出来ると思いますし、こちらにこういう情報がでていて、こちらにこういう情報が出ていてというのも恐らく管理が出来るかなと思うのですが。まあ、テストしながらですね。

質問⑤

——今後これはどんなふうになって行くと思われませんか。クラシックファンは結構保守的な方も多いと思うんですね。なので、今後メジャーになっていくものなのか、トライアル挑戦なのか。

西本：オペラにももっと入ってくると思います。この分野、日本は遅いです。いまもうやってます。実現はしませんでしたけど、2011年にトスカを上演するにあたり、建物をゆがんだように見せたかったんです。最後崩れて

いくようにしたかった。これを装置でやろうとすると危ないんですね。その時に、これは映像であれば出来るなと。今回でてきたクリスマスツリー、バレエではネズミのサイズに女の子が小さくなっていくのを表すために、装置を大きくサイズを変えたりします。けれども映像の可能性としては、そういったことはいくらでも出来る。来年の1月の白鳥の湖については、この間リハーサルの後に田村さんと大体の流れの打ち合わせをしたんですけども、白鳥の湖ですから、森があったり、そういう距離感と言うのを是非やりたいと、リクエストしております。現実的に舞台装置に限界ってあるじゃないですか。すごく素晴らしいですよ、舞台装置も。なんですが、映像だからこそこんなことが出来るんだと利点を生かしていけば、これは大いに、凄く発展的になると思います。私も楽しみにしております。



終演後 サントリーホール 楽屋3にて

左より、平井俊邦（日本フィル専務理事）、田村吾郎（MPS アートディレクター／RamAir.LCC 代表）／西本智実（日本フィルミュージック・パートナー 指揮・台本） 吉田ひさよ（クリスティ・デジタル・システムズ日本支社／マーケティング・スペシャリスト）

今後も情報アップしてまいります。続報は MPS 特設ページをご覧ください。

MPS 特設サイト <http://mps.japanphil.or.jp/>

2013年11月29日